



営農NEWS



ネギハモグリバエの別系統が県内で初めて 確認されました

病害虫発生予察特殊報第 1 号（県病害虫防除所 5 月 20 日発表）によると

平成 30 年 10 月に、ハモグリバエ類による秋冬ネギの葉組織が食い尽くされ、従来の被害状況とは異なる著しく白化する被害が県内ネギ圃場において発生しました。このため、県農業総合センター園芸研究所で羽化した個体の検鏡検査およびミトコンドリア COI 領域の塩基配列を解析したところ、従来のネギハモグリバエ A 系統とは異なる新たな B 系統の個体であると確認しました。

国内におけるネギハモグリバエ B 系統の発生は、平成 28 年頃より京都府で、平成 29 年頃より富山県で確認されており、平成 31 年 3 月に京都府から特殊報が発表されています。

<被害状況>

ネギハモグリバエ B 系統は、一葉あたりに複数頭の幼虫が葉の内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害します。A 系統と比較して、一葉あたりの幼虫数が多い傾向です。B 系統でも初期の食害痕は A 系統と同様で不規則な白線状ですが、被害が進展すると近接した食害痕同士が融合して葉全体が白化したようになります。これらの葉は葉肉が食い尽くされて表皮が浮いた状態になり、表皮をむくと多数の幼虫が確認されます。

<ネギハモグリバエ B 系統の形態や生態の特徴>

ネギハモグリバエの A 系統と B 系統を、形態で識別することは困難です。両系統とも成虫は体長約 2 mm、胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色です。成虫は葉の組織内に産卵し、ふ化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害します。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約 4 mm に達し、その後、葉から脱出して地表または土中で蛹となります。蛹は体長約 3 mm の褐色、俵状です。

<防除のポイント>

- 1 発生を認めたら下表を参考に、ネギハモグリバエに適用のある薬剤で発生初期の防除に努めてください。
- 2 被害葉や収穫残渣は本種の発生源となるので、圃場内に放置せず、集めて積み上げ、ビニール等で被覆して裾を土で埋めておくなど 虫を死滅させるように適切に処理します。

表 1 ネギのネギハモグリバエの主な防除薬剤

（令和元年 5 月 22 日現在）

薬 剤 名	使用量または希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
ベストガード粒剤	6 kg/10a (植溝処理土壌混和)	定植時 / 1 回	4A
	6 kg/10a (株元処理)	(生育期) 収穫前日まで / 3 回以内	
	5g/育苗培土 1ℓ を混和	播種時 / 1 回	
ベリマーク SC	400 倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	育苗期後半～定植当日 / 1 回	28
	2,000 倍 (0.5ℓ/m ² 株元灌注)	(生育期) 収穫 7 日前まで / 1 回	
スタークル顆粒水溶剤	50 倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	定植前日～定植時 / 1 回	4A
ディアナ SC	2,500～5,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	5
アグリメック	500～1,000 倍	収穫 3 日前まで / 3 回以内	6
アフーム乳剤	1,000 倍	収穫 7 日前まで / 3 回以内	6
カスケード乳剤	4,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内	15
アクタラ顆粒水溶剤	1,000～2,000 倍	収穫 3 日前まで / 3 回以内	4A

注) 1. ※印は、セル成型育苗トレイ 1 箱またはペーパーポット 1 冊 (30×60cm・使用土壌約 1.5～4ℓ) を略しました。

2. 薬剤の中には、上記処理以外の登録もあります。各薬剤の成分別総使用回数を超えないよう十分に注意してください。

3. 分類欄には、IRAC コードを記載しました。同一分類 (コード) は作用点が同じなので、連用は避けてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040